

『「ごちそうさま」もらったのは“命”のバトン ～子どもがつくる“弁当の日”10年の軌跡～』

竹下 和男著

農業・農村領域 上席主任研究官 畠 幸司

小中学生の生徒が、誰の助けも借りずに一人で弁当をつくり学校に持参して食べる「弁当の日」という取組が、幼稚園、高校、大学を含めて47都道府県の子を超える学校で実施され、さらに企業や団体にも広がっているそうです。

栄養バランスなどの点で海外からも評価され、かつて「豊」食（ほうしょく）とされた我が国の食生活は、多くの食品が輸入される中、「飽」食、「崩」食や「呆」食と言われるように様々に乱れ、包丁がない家庭があることや、親が食事をつくることができないことも驚くことではなくなり、様々な社会問題にも繋がっていると言われています。

子どもたちの心の問題に危機感を抱いた著者は、家族間の愛情のやりとりとなる家庭料理の大切さを子どもたちに気づいてほしいと、小学校長として着任した母校で「弁当の日」を始めました。その後に異動した中学校2校でも実践し、『「弁当の日」がやってきた』（自然食通信社）、『台所に立つ子どもたち』（自然食通信社）、本著などを著しています。本著は、10年間の取組成果を事例により紹介するとともに、新たにに取り組む学校の参考となるように、考え方などをQ & A形式で整理しています。

最初に実施した小学校のランチルームでの写真が印象的です。各学年が一緒にテーブルを囲み、「弁当の日」は5～6年生が手製の弁当、下級生は給食を食べますが、6年生が弁当を披露してカメラに向かう横で、1年生の目が6年生の弁当に釘付けになっています。「自分も早く弁当をつくりたい」と言わんばかりに。その下には5年後の写真。羨ましげに弁当を見ていた1年生が6年生になり自分の弁当を自慢げに披露する横から、同じように低学年が弁当を覗き込んでいます。そして、次の写真も…。著者は、生きる力や料理する技術が自然にバトンタッチされることの重要性を訴えています。

生徒の作文も掲載されており、中には食材に対する感謝の気持ちを表したものがあります。「いただきます」「ごちそうさま」の大切さが分かった。…私たちのせいで命を落とす動物や野菜たちのためにきちんと

言わなければならないと思った。」「自分が弁当を食べられるのは、その食材のおかげです。…「いただきます」や「ごちそうさま」という言葉にはすごい力があると思うし、大切なことだと思いまし

た。」と。遠い海外からの輸入や工場内での加工など、食品の生産される場が、物理的・精神的に消費者から遠く離れている状況において、このように考えることができる生徒が増えることを期待します。

著者は、学校の最高権力者である校長という立場で、半ば強引に（教師や保護者の不安や反発を和らげる努力はしつつも）「弁当の日」を始めました。危険があり事故が発生した際に学校として責任をとれない、家庭環境等によって弁当をつくれない生徒がいる、現在の教師は非常に多忙であるなど、反対意見は数多くあり、取り組みたいと考える保護者がいても実施できない学校もあるようです。実は、著者自身も、指の切断、ガス爆発といった事故や教師の負担という不安があったそうですが、それ以上に子どもたちの成長にとって必要なことだと考え、実施に踏み切ったのです。

自分で弁当をつくることによって、子どもたちは調理の大変さに気づき、調理してくれる人に感謝するなど、著者の狙いとしたことが、いろいろな面で成果となって現れているようです。この本が、改めて食の大切さについて考えるきっかけになればと思います。

これまでに、著者の講演を何度か聞く機会がありました。著者自らが撮った写真を使い、巧みな話術で進められる講演は、子どもたちの言動に驚き、感動するうちに、いつもあっという間に終わってしまいます。モノが溢れる今日、「心の空腹感を満たす」という言葉は心に染みます。機会があれば、講演を聴かれることをお勧めします。本を読んだ時の感動が増すに違いありません。



『「ごちそうさま」もらったのは“命”のバトン
～子どもがつくる“弁当の日”10年の軌跡～』

著者／竹下 和男

出版年／2012年3月

発行所／自然食通信社